
一般論文

わらべうたによる幼小接続についての一考察(2) —「音符、休符、記号や用語」の学習に着目して—

Curriculum for Connecting Kindergarten to Elementary School using Warabe-uta (2):
Focusing on the learning of notes, rests, notational symbols and musical terms

室 町 さやか

MUROMACHI Sayaka

概 要

2017年は新たな小学校学習指導要領、幼稚園教育要領が公示されたが、「音符、休符、記号や音楽にかかる用語」の指導については、指導する学年や体系的な学習方法については明記されておらず、現行の学習指導要領からの改善はみられなかった。本研究では小学校音楽授業における「音符、休符、記号や用語」学習の現状と課題について論じ、幼児期と児童期とをなだらかに接続するための音楽カリキュラムについて考察した。このカリキュラムでは幼児期の活動では友だちとあそびながら音楽的諸要素を経験的に体得することで就学後の学習になだらかに移行できるよう留意し、小学校1年時の活動では、就学前に遊んだわらべうたを用いることで子どもたちの経験を学習へと地続きに繋げ、楽曲の音楽的な構成要素とを経験と照らし合させて分析し、リズムあそびによって再構成することで無理のない「音符、休符、記号や用語」の学習を目指している。

はじめに

2017年は新たな小学校学習指導要領（以下、学習指導要領）、幼稚園教育要領（以下、教育要領）が公示された年である。小学校学習指導要領における音楽科の目標も他の科目と同じく(1)知識及び技能、(2)思考力、判断力、表現力等、(3)学びに向かう力、人間性等の三つの柱で示され、文部科学省が示した通り「何ができるか」を明確化した記述となっている。音楽についても何を指導すべきかがより明確になっており、とりわけこれまで音名と混同されがちであった階名についての説明が明記されたことは大きな一步であるといえる。しかしながら、2008年公示の現行の学習指導要領において「児童の学習状況を考慮して取り扱うこと」とされていた「音符、休符、記号や音楽にか

かわる用語」の指導については、「児童の学習状況を考慮して、次に示すものを音楽における働きと関わらせて理解し、活用できるよう取り扱うこと。」と文章の変化は見られるが、どの段階でどの音符や用語を学習するかは教員の指導計画に一任されている点は、現行の学習指導要領と同様であり、従来からの改善はみられなかった。本研究では小学校音楽授業における「音符、休符、記号や用語」学習の現状と課題について論じ、幼児期と児童期とをなだらかに接続するための音楽カリキュラムについて考察した。

1. 小学校における「音符、休符、記号や用語」学習の現状
小学校において学習指導要領に示されている「音符、休符、記号や用語」の学習が充分に行わ

れていないのではないかという指摘は、これまでに多くの先行研究によってなされてきた。吉富と三村の2009年の研究では、中学生を対象としたペーパー調査テストが実施された。この研究は国立大学法人附属中学校の1年生を対象に学習指導要領の「音符、休符、記号や音楽にかかわる用語」が理解されているかどうかを調査するものであったが、これらの音符等の理解はほとんど定着しておらず、理解度が高い場合でも小学校の音楽の授業以外の習い事や部活動などの音楽的経験によるものであるということが明らかにされている（吉富、三村 2009）。吉富らは2010年にも対象を中学生から大学生の範囲に広げて調査を行っているが、たとえば授業以外の音楽的経験の乏しい中学生の場合、95%以上が拍子記号について理解していないなど、小学校課程における「音符、休符、記号や用語」の学習に課題があることが浮き彫りとなった（吉富、三村 2010）。

「音符、休符、記号や用語」の理解ができるいるか否かは子どもたちが長じて大学に入学した後にも影響する可能性がある。たとえば保育士養成課程や小学校教員養成課程では、学生が保育士または教員の職に就いた際に子どもたちと音楽活動をするための技術や知識を身に付けることが必要とされているが、高御堂が2011年に保育士養成課程の大学生を対象に実施した読譜力及びリズム読譜力に関する調査では、ピアノ未経験の学生のうち約80%が楽譜に対して「全く読めない」「やや読めない」という意識を持っていることが明らかになった（高御堂 2011:137）。同様の問題は教員養成課程においても顕著に現れている。室町が2015年に教員養成課程の学生を対象に行った調査は現行の学習指導要領に示された「音符、休符、記号や音楽にかかわる用語」の一部について「わかる」「まあまあわかる」「わからない」の三段階で学生がこれらを理解しているかどうかの意識を調査したものであるが、これらの音符や記号について「分からない」と回答した学生は全ての項目の平均で40%に上った（室町 2015）。

これらの調査から見えてくることは、小学校課程において「音符、休符、記号や用語」の指導が適切に行われていないという現状であり、吉富らは学習指導要領に明示された内容の学習がおざな

りにされている事實を指摘している（吉富、三村 2009:92）。すでに述べた通り、新学習指導要領では「何ができるか」が明確化されているが、「音符、休符、記号や用語」の指導については何をいつどのように教えたら良いのかが明示されていないほぼ従来どおりの記述であり、音楽を専門に学んだことのない教員の場合は指導することが困難であることが予想される。今後の学習指導要領の改訂に向けて「音符、休符、記号や用語」の指導をどのようにすべきかを考慮し、この問題について議論を続けることが必要とされている。

2. 幼小接続を見据えた音楽カリキュラムの作成にあたって

前年度に発表した「わらべうたによる幼小接続についての一考察」では、音楽における幼小接続では小学校課程における学習内容を就学前に学習するのではなく、就学後の学習に向けて子どもの音楽的発達を形成することが必要であり、幼児にとって学びそのものである「あそび」を小学校課程の学びへと地続きに繋げることが重要であると述べた（室町 2016:138）。本項では、幼小接続を見据えた幼児期の音楽活動について改めて考察したい。

すでに2009年に文部科学省と厚生労働省が、保幼小連携の実践をとりまとめているように、全国的に保幼小の連携や接続に関する試みは数多く行われている（文部科学省、厚生労働省 2009）。しかしながら「接続を見通した教育課程の編成・実施が行われている」事例は少数であり、今後は学習内容に踏み込んだ連携・接続の活動が必要となることが考えられる。「接続を見通した教育課程の編成・実施」の実践には、教員が多忙なため共通カリキュラムを作成する時間が乏しいこと、小学校教員に幼児の理解や幼稚園及び保育所での教育内容の理解が不足していること、幼稚園及び保育所の教員に児童の理解や小学校の教育内容の理解が不足していることなど多くの困難が伴うことが予測されるが、その前段階として幼稚園教育要領（以下、教育要領）の「領域」と学習指導要領の「教科」という異なる枠組みの内容を比較することが可能であるかという問題についても論じておく必要がある。

小学校教育における「教科」はそれぞれが独立しており、実際に指導する学習内容が体系化されたカリキュラムである。一方幼稚園教育における「領域」では各領域は明確に区別されるものではなく、学習内容は体系化されず子どもたちが環境を通して学ぶカリキュラムとなっている。1991年に施行された教育要領では、それまでの6領域が5領域へと変わったが、これには教科教育主義的に受け止められてしまうという反省が側面にあったとされる（岡本、山浦 1998:60）。岡本と山浦の研究は、現行の学習指導要領が施行される前の1998年に発表されたものであるが、「就学直前までにはすでに小学校での教科教育に備えた準備を終えておくべきである」とするこのような考え方には、子どもの発達を無視したまま、かれらを学校教育の都合のいいように枠組みの中にはめ込もうとするものであり、幼一小の連続性を学校教育側からみた一方的な見方ではないだろうか。」という疑問は現在の幼小接続の場においても通じるものである（岡本、山浦 1998:60）。また前田は幼児期と児童期の教育方法の違いはあくまでも方法の違いであり、教育のねらいは同じであると論じ、保幼小どちらかに一方的に合わせたカリキュラムではなく、新しい接続カリキュラムを作成することが必要であると述べている（善野、前田 2004:43）。佐々木も著書の中で「幼稚園の遊びが生み出す教育的・人間的成果をこのようにストレートに教科と結び付けてしまうと、再び幼稚園の教育が小学校の教科学習の「下請け」のように見なされてしまうのではないか」という懸念を表しているが、幼稚園教育における遊びを通しての学びの効果が理解しやすいよう教科の視点から遊びを分析している（佐々木 et al 2004:22-24）。

これらの先行研究でも述べられているように、小学校の「教科」と幼稚園の「領域」は異なるものであり、双方について論じる際には注意を払う必要がある。しかしながら、幼児期の先に児童期がある以上、子どもの発達段階の先を見据えて教育及び保育を行うことは必然であり、「教科」と「領域」の違いを認識しながら児童期の発達段階に待ち受けている「教科」の視点から幼稚園の「領域」における教育効果を整理することは、幼小接続カリキュラムを構築するために必要な過程

である。しかしながら幼小接続における幼児教育は、小学校教育を先取りするものではなく、子どもの発達段階に合わせて「遊び」を通じて音楽的レディネスを形成し、小学校課程の教科へとつなだらかに接続することが肝要であることは論を待たない。

3. わらべうたによる幼小接続の提案

小学校の教科である音楽には、幼稚園の「領域」に繋がる性格を多く持っていると考えられる。「教科 音楽」は「A表現（歌唱、器楽、音楽づくり）」、「B鑑賞」のふたつで構成されており、これらの活動を通じて学ぶ内容は必ずしも独立した段階的なものであるとはいはず、達成すべき目標があってもそれはひとつの活動のみではなく様々な活動を総合して経験的に学ばれるものも多い。これは幼稚園教育要領における「領域」と通じる性格であることができ、この領域的な性格によって、音楽の授業は幼小接続において効果的に機能する場となる可能性に富んでいる。しかしながら一方でこの領域的な性質が「音符、休符、記号や用語」の指導を困難にしている可能性がある。「音符、休符、記号や用語」はふたつの領域双方の活動において指導すべき「共通事項」として位置づけられており、新学習指導要領の解説では次のように述べられている。

指導に当たっては、単にその名称やその意味を知ることだけではなく、表現及び鑑賞の様々な学習活動の中で、音楽における働きと関わらせて、実感を伴ってその意味を理解できるようにするとともに、表現及び鑑賞の各活動の中で、活用できるように配慮することが大切である。（文部科学省 2017 125）（下線は筆者）

下線部分、「表現及び鑑賞の様々な学習活動の中で」「表現及び鑑賞の各活動の中で」は、授業の中で歌を歌ったり楽器を演奏したりする活動を通じて経験的に「音符、休符、記号や用語」を学ぶことを示唆しているように捉えられる。これは「教科」よりも「領域」に近い学習活動であるといいうことができるが、「音符、休符、記号や用語」については経験的に学ぶと同時に体系的な学習を行なう必要があることを考慮しなければならない。学習指導要領に示されているのは、音符、休符、

音部記号、強弱記号、演奏記号、その他の記譜に関する記号である。これらの音符や記号は「記譜法」に属するものであるが、たとえばここに挙げられている音符の音価は11世紀頃のリズム・モードから13世紀にケルンのフランコが著した「計量記譜法」を経て18世紀ころにほぼ現在の形となったものであり、作曲家や理論家が緻密な理論を重ねて今日に至った楽典の理論的内容を歌唱や器楽などの経験的な活動による学習のみで習得することは困難であり、これらの経験的な活動と合わせて体系的な学習を行うことが必要であると考えられる。

本項ではわらべうたを用いて幼児教育における「領域」で培われた学びを踏まえて、幼児期の音楽活動を「教科 音楽」が持つ領域的な性格に接続させ、体系的な学習活動を加えることで「音符、休符、記号や用語」学習のための幼小接続カリキュラムを提示する。わらべうたは音域や歌いやすさ、遊びを伴うことなどから幼児にとって良質な教材であり（室町 2017）、小学校音楽教育においても多くの実践や先行研究で用いられてきた。わらべうたを学校教育に採り入れる際の問題点としては、小島が論じた「遊び」から「学習」への連続性の確保が挙げられる（小島 2009）。小島はわらべうたの音楽性、表現性、社会性という教育的意義を支える土壌が「遊び」であると述べており、わらべうたを経験として捉え、経験を再構成することで遊びから学習への連続性を保つ「経験の再構成型」のわらべうた教育を提唱しており、西條の実践（西條 2008）を例に挙げて論じている。本研

究では《なべなべそこぬけ》（譜例1）を例に、わらべうたを単なる教材として扱うのではなく、幼児期の「経験」すなわち領域的な学びであると捉え、「音符、休符、記号や用語」の学習に向けた幼小接続のカリキュラムモデルを提示した（表1）（表2）。なお、表中に引用した「教育要領」、「学習指導要領」は2017年に公示されたものである。年長時の活動（表1）では友だちとあそびながら歌唱に親しみ、音程感、リズム感、拍感などを経験的に体得することで就学後の学習になだらかに移行できるよう留意している。小学校1年時の活動（表2）は、わらべうたによる幼小接続のカリキュラムを主な学習活動と学習可能な「音符、休符、記号や用語」の表で示したものであり、就学前に遊んだわらべうたを用いることで子どもたちの経験を学習へと地続きに繋げ、楽曲の音楽的な構成要素とを経験と照らし合わせて分析し、リズムあそびによって再構成することで子どもたちに負担なく「音符、休符、記号や用語」を学習することを目指している。また音楽的な発達段階にも考慮しており、スワンウィックの音楽的発達の螺旋状過程図によれば、日本の学校教育における幼小接続期と重なる4～9歳は「表現」の段階に区分されるが（Swanwick 1992:109）、この段階は自身で表現を工夫すること（個人的表現性）や一般的な拍子感やリズムなど（音楽の日常的語法）への関心が高まる時期であるとされており（竹井 1997:102）、本研究で提示したカリキュラムはこの音楽的発達段階を考慮したものとなっている。

譜例1) 《なべなべそこぬけ》

表1)《なべなべそこぬけ》による幼小接続カリキュラムの例（年長時）

子どもの活動	活動と関連性を持つ幼稚園教育要領「内容」におけるねらいと内容の記述	小学校課程に向けて形成が期待される音楽的レディネス
<p>(1) 《なべなべそこぬけ》を歌う</p> <p>(2) 歌いながら二人一組で向かい合って手を繋ぎ、拍に合わせて腕を左右に振る。</p> <p>(3) 「かえりましょ」の部分で手を繋いだまま背中合わせになる。</p> <p>(4) 繰り返して歌いながら背中合わせで手を繋ぎ、「かえりましょ」の部分で手を繋いだまま向かい合いで戻る。</p> <p>上記のあそびに慣れたら別のあそび方で繰り返しあそぶ。二人一組のまま円になり、(4)で背中合わせのまま二人の位置を入れ替え、新たに向かいあつたパートナーとあそびを行う。これらのあそびを初めのパートナーに戻るまで繰り返す。</p>	<p>健康（ねらい）</p> <p>(1) 明るく伸び伸びと行動し、充実感を味わう。 (内容)</p> <p>(2) 様々な遊びの中で、幼児が興味や関心、能力に応じて全身を使って活動することにより、体を動かす楽しさを味わい、自分の体を大切にしようとする気持ちが育つようになること。その際、多様な動きを経験する中で、体の動きを調整するようになること。</p> <p>人間関係（ねらい）</p> <p>(2) 身近な人と親しみ、関わりを深め、工夫したり、協力したりして一緒に活動する楽しさを味わい、愛情や信頼感をもつ。 (内容)</p> <p>(4) いろいろな遊びを楽しみながら物事をやり遂げようとする気持ちをもつ。</p> <p>(8) 友達と楽しく活動する中で、共通の目的を見いだし、工夫したり、協力したりなどする。</p> <p>環境（ねらい）</p> <p>(1) 身近な環境に親しみ、自然と触れ合う中で様々な事象に興味や関心をもつ。 (内容)</p> <p>(6) 日常生活の中で、我が国や地域社会における様々な文化や伝統に親しむ。</p> <p>言葉（ねらい）</p> <p>(3) 日常生活に必要な言葉が分かるようになるとともに、絵本や物語などに親しみ、言葉に対する感覚を豊かにし、先生や友達と心を通わせる。 (内容)</p> <p>(7) 生活の中で言葉の楽しさや美しさに気付く。</p> <p>(8) いろいろな体験を通じてイメージや言葉を豊かにする。</p> <p>表現（ねらい）</p> <p>(1) いろいろなもののかっこよさなどに対する豊かな感性をもつ。</p> <p>(2) 感じたことや考えたことを自分なりに表現して楽しむ。</p> <p>(3) 生活の中でイメージを豊かにし、様々な表現を楽しむ。 (内容)</p> <p>(6) 音楽に親しみ、歌を歌ったり、簡単なリズム楽器を使ったりなどする楽しさを味わう。</p> <p>(8) 自分のイメージを動きや言葉などで表現したり、演じて遊んだりするなどの楽しさを味わう。</p>	<ul style="list-style-type: none"> • 音楽への親しみ • 歌唱への親しみ • 音程感 • 拍感 • リズム感

表2)《なべなべそこぬけ》による幼小接続カリキュラムの例（小学校1学年時）

時間	主な学習活動	学習する「音符、休符、記号や用語」
第一次	<ul style="list-style-type: none"> ・年長時に行った《なべなべそこぬけ》のあそびを行う。子どもたちが就学前の活動を思い出してのびのびと歌い、友だちとあそぶことを楽しめるように配慮する。 ・歌唱しながらリズム叩きを行う。子どもたちが叩きながら歌うのに慣れたら歌唱はせずリズム叩きのみを行う。 ・リズム叩きの活動を振り返り、早く叩くところ、ゆっくり叩くところ、叩かないところで楽曲が構成されていることに気づく。 ・音符を提示し、「早く叩くところ（八分音符）、ゆっくり叩くところ（四分音符）、叩かないところ（四分休符）」のように音価と音符を結び付ける。 	・四分音符、八分音符、四分休符
第二次	<ul style="list-style-type: none"> ・前時の復習を行う。 ・ところどころ音符が書かれておらず穴埋めができるようにした音高のないリズムのみの楽譜を提示したワークシートを配布し、歌と結び付けながら四分音符、八分音符、四分休符を書き入れる。 ・それぞれの音符、休符の音価を意識しながら歌う。 ・体を使ったリズムあそびを行う。四分音符、八分音符の箇所は音価に合わせて歩き、四分休符はその場に立ち止まって手を叩く。子どもたちが慣れてきたら円になり、輪あそびのようになるなど、楽しみながら繰り返すことで音符と音価を学習する。 	

結語

本研究では現在の日本の小学校音楽教育における「音符、休符、記号や用語」学習の問題について論じ、わらべうたを用いたなだらかな幼小接続カリキュラムの一例を提示した。わらべうたを幼小接続に用いる際には、わらべうたを単なる「教材」として使用するのではなく、幼児期に行われたわらべうたの経験によって子どもたちが学んだ内容を認識し、あそびと学習の間に垣根を作らないことに留意する必要がある。日本の音楽教育において音楽的リテラシー能力を向上させためには、子どもの音楽的発達段階を考慮しながらあそびと学習とをなだらかに接続させ、無理のない「音符、休符、記号や用語」学習のための分かりやすいカリキュラムが必要とされていると考えている。

年間を見通した指導計画に沿って学習を進める中で、音楽活動を通して徐々に実感を伴って理解し、活用できる知識として身に付けていくようにすることが大切である。」(文部科学省 2017:125)

² 2008年公示の現行の学習指導要領においては「音符、休符、記号や音楽にかかる用語」であるが、2017年公示の新学習指導要領においては「音符、休符、記号や用語」となっている。本論では特に区別する必要がある場合を除いて後者の表現を用いることとする。

引用・参考文献

- Swanwick, Keith, 野波健彦訳. 1992.『音楽と心と教育：新しい音楽教育の理論的指標』音楽之友社.
 岡本拡子, 山浦菊子. 1998. "日本の音楽教育における幼・小連続性の課題・幼稚園教育要領と小学校学習指導要領の比較から." 聖和大学論集 26. 聖和大学: 59-73.
 小島 律子. 2009. "学校音楽教育におけるわらべうたの再考--「教材」としてのわらべうたから「経験」としてのわらべうたへ." 大阪教育大学紀要 58 (1). 大阪教育大学: 43-55.
 西條 友香. 2008. "わらべ歌を学習へ発展させる授業構成の視点." 学校音楽教育研究：日本学校音楽教育実

¹ 「これらについては、特に配当学年は示していないが、取り扱う教材、内容との関連で必要と考えられる時点で、その都度繰り返し指導していくようにし、6

- 践学会紀要 12. 日本学校音楽教育実践学会: 205-15.
- 佐々木宏子, 鳴門教育大学学校教育学部附属幼稚園.
- 2004.『なめらかな幼小の連携教育:その実践とモデルカリキュラム』チャイルド本社.
- 竹井成美. 1997. "児童・生徒の音楽的発達に即した音楽鑑賞教育の在り方(1): キース・スワンウイックの「音楽的発達の螺旋状過程」図に照らした中学校音楽鑑賞教育を中心として." 宮崎大学教育学部紀要 82. 宮崎大学: 61-74.
- 高御堂愛子. 2011. "保育者・小学校教諭を目指す学生の読譜力とリズム感について: 東海学園大学人文学部発達教育科第2期生の実態調査より." 東海学園大学研究紀要: 人文科学研究編 16. 東海学園大学: 131-47.
- 室町さやか 2013. "幼児教育におけるわらべうたの意義と指導法 ~コーダーイ・メソッドに鑑みて~." 千葉経済大学短期大学部研究紀要 9. 千葉経済大学短期大学部: 45-54.
- 室町さやか 2015. "小学校音楽科におけるわらべうた教材を用いた読譜教育:《ひらいたひらいた》を例に." 環太平洋大学研究紀要 9. 環太平洋大学: 27-33.
- 室町さやか 2016 わらべうたによる幼小接続についての一考察 - 小学校学習指導要領と幼稚園教育要領の比較から 山梨学院短期大学研究紀要 37, 131-139.
- 文部科学省, 厚生労働省. 2009. "保育所や幼稚園等と小学校における連携事例集." http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/youchien/1258039.htm.
- 文部科学省.2017 "小学校学習指導要領解説 音楽編." http://www.mext.go.jp/component/a_menu/educa tion/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2017/08/02/1387017_7_1.pdf.
- .2017 "幼稚園教育要領" http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_ics Files/afieldfile/2017/05/12/1384661_3_2.pdf.
- 吉富功修,三村真弓. 2009. "小学校音楽科の学力に関する研究(1)音符,休符,記号等の理解を中心として." 環太平洋大学研究紀要, 2. 環太平洋大学: 85-94.
- . 2010. "小学校音楽科の学力に関する研究(2)音符,休符,記号等の理解." 環太平洋大学研究紀要 3. 環太平洋大学: 25-32.

